

第1回

研究戦略としてのケース・スタディ

—ケース・スタディとは何か—

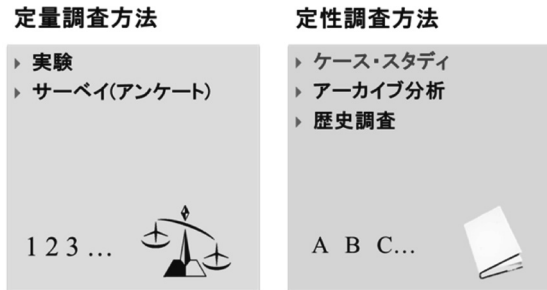
横 澤 公 道

1. はじめに

ケース・スタディと聞くと、MBA（経営学修士）などの経営系の大学院の授業中に扱う学習法を思い浮かべる方も多かもしれません。この学習法はケース・スタディ・メソッドやケース・メソッドと呼ばれ、組織の事例（ケース）から企業などが抱える問題を解決するための能力を養うための手法の一つです。この学習法において、実在する企業の成功例や失敗例を通じて企業がなぜそういう結果になったのかという原因を財務・会計、経営、マーケティングなど様々な角度から分析します。そして企業の問題を、解決するためのアクションプランを立てます。本来ならば、それを問題に適用して、効果があるのか評価するのですが、通常MBAの授業ではその制約から、分析手法や結果、アクションプランについて議論するところまで行うのが一般的です。こうした様々なケースを使ったトレーニングを繰り返すことで、実際の経営課題に対して効果的な策を講じることができるようになっていくと考えられているのです。

本シリーズで扱うのはこの学習法ではなく、研究戦略としてのケース・スタディです。研究戦略（Research Strategy）とは、「研究者がリサーチクエスションに答えるための大まかなプラン（Saunders, Lewis, & Thornhill, 2009, p. 90）」のことで、要するに研究者が理論をつくるための方法です。研究戦略は、定量的研究法と定性的研究法に大きく分けられます。定量的研究法（Quantitative Research Methods）とは、自然界に起こる現象や、人が引き起こす事象を数字に変換して分析することで理論化を目指す研究法で、実験やサーベイが研究戦略として含まれます。研究テーマの中には数字への変換が難しい、または数字に変換すると意味が薄まってしまう現象（例えば、組織変革の詳細なプロセス）があります。そういった場合は、現象を文字や文章に変換して分析し、理解しようと試みる定性的研究法（Qualitative Research Methods）を使います。定性的研究に含まれる主な研究戦略としてアーカイブ分析や歴史調査、そして今回着目するケース・スタディがあります。

ケース・スタディとは、医学、看護学、社会学、そして経営学などの学問領域で多く用いられ、現代の事例を使って理論（仮説）を実証、修正、または構築するための研究戦略の一つです。本シリーズにおいて、ケース・スタディ研究戦略に焦点を絞り、主なアプローチ、主要概念、手順などを解説していきます。



2. 研究戦略の選び方

研究を進めていくと、自分の研究に適した研究戦略をどのように選べばいいのかという問題に直面することになるでしょう。著名な方法論学者であるYin (1984) によると1) リサーチエスチョンの種類, 2) 調査対象の行動をコントロールする必要性の有無, そして3) 焦点がいつに当てられているかを判断基準に選択できると述べております。

2.1 リサーチエスチョンの種類

学術論文には、必ず一つ以上のリサーチエスチョンが必要です。リサーチエスチョンは、既存理論の穴を埋めるためのものであると同時に、経営学研究においては、実務的な貢献が求められます。またクエスチョンという名の通り5W1Hではじまる質問形式で設定します。研究戦略の内、サーベイやアーカイブ分析は「誰が (Who)」「なにを (What)」「どこで (Where)」「いくつくらい (How many)」「どれくらい (How much)」ではじまる質問に対して答えを出すことに適しております。一方、実験、歴史調査、ケース・スタディは、「どのように (How)」、「なぜ (Why)」で始まる質問に答えるのに長けております。例えば、Sutton and Rafaeli (1988) は、Untangling the Relationship between Displayed Emotions and Organizational Sales: The Case of Convenience Storesという論文の前半部分で、「従業員の顧客に対するポジティブな感情表現は、店舗の売上を向上させる」という仮説を立て実証を試みます。既存理論から推論したこの仮説は、従業員の感情表現と店舗の売上に関係性があることが前提ですので、「どれくらい」の関係性があるかというリサーチエスチョンにも置き換えられます。この質問に答えるために、筆者らはサーベイを研究戦略として選択します。しかし結果は、予想と反し、従業員が客に対しポジティブな感情表現をしている店舗は売上が低いという関係性があるという分析結果が出てしまいます。筆者たちは、次に「なぜ」こういった関係性が現れたのかという新たなリサーチエスチョンを設定し、それに答えるためにケース・スタディを研究戦略として選択し、その理由を探索したのです。

研究を始める前から自分はケース・スタディをやりたい、もしくはサーベイでデータを取りたいという考えが先行している方もいるかもしれませんが、まずはリサーチエスチョンを考え、それにあった研究戦略を考えるというのが本来とるべき手順になります。

他にも有名ジャーナルに載ったケース・スタディ論文のリサーチエスチョンを見てみることにしましょう。WhyのほかにHowから始まるリサーチエスチョンを提示していることがわかります。

論文	リサーチクエスチョン
Eisenhardt, K. M. (1989b). Making Fast Strategic Decisions In High-Velocity Environments. <i>Academy of Management Journal</i> , 32 (3), 543-576.	“This article is organized around two research questions: (1) <u>How</u> are fast strategic decisions made? and (2) <u>How</u> does decision speed link to performance? (P. 544, L.4)” 本稿は二つのリサーチクエスチョンを中心に構成されている：(1) <u>どのように</u> 迅速な戦略的意思決定がなされているか (2) <u>どのように</u> 意思決定の速度が成果に結びついているのか。
Su, H.-C., Linderman, K., Schroeder, R. G., & Van de Ven, A. H. (2014). A comparative case study of sustaining quality as a competitive advantage. <i>Journal of Operations Management</i> , 32 (7-8), 429-445.	“This paper fills this gap by examining the following research question: <u>how</u> do organizations sustain a competitive advantage in quality? (P.430, L.7)” 本稿は、次のリサーチクエスチョンを考察することでこの空白を埋める：組織は <u>どのように</u> 品質の競争優位を維持するのだろうか。

2.2 調査対象をコントロールする必要性

ケース・スタディと実験は、どちらも「どのように」「なぜ」から始まる質問に答えることができますが、どちらを行うかを定める一つの基準は、調査の対象やそれが置かれている環境を研究者がコントロールできるか否かにあります。実験を行うには、調査対象とそれが置かれている環境を切り離すことが前提になります。そのうえで対象に干渉したり、置かれている環境をコントロールしたりして、その結果、成果が異なるかを観察します。例えば、1920年から30年に米国シカゴ近郊のホーンソン工場において、職場環境と労働者の作業能率との関係性を調べることを目的にした一連の実験が行われました。研究者らは工場建屋の照明の明るさが労働者の作業効率に影響すると仮定し、実験を行ったところ、照明を明るくしても、暗くしても労働者の作業能率が従来よりも高くなることが明らかになりました。その理由として、照明よりも実験を行う研究者たちが労働者らを観察していることが作業効率に影響したことといわれております。この結果から、労働者の作業能率は、職場の環境よりも職場における人間関係や目標意識に左右されるのではないかという仮説が導き出され、その後の経営学に大きな影響を及ぼすこととなります。この一連の研究を工場の名前を取ってホーンソン研究・実験と呼ばれますが、この実験において客観的な職場環境をコントロールすることでどのように成果が異なるかを調べております。一方で、環境をコントロールすることが不可能な歴史研究やアーカイブ分析はもとより、サーベイやケース・スタディは、対象と環境に線引きが難しい、あるいは環境のコントロールが困難な対象に対して、研究者は研究対象に干渉せず、客観的な観察者としての立ち位置をとります。

2.3 現代の出来事への焦点

最後にケース・スタディは、歴史調査と異なり、現代の出来事に焦点を当てております。歴史調査は、古文書、遺物・遺構などの証拠から、今まで研究されていなかった過去のある期間を記述したり、今までとは異なる視点から歴史的な出来事を考察することで新しい歴史的側面

を発見したりすることが目的です。歴史調査において直接観察、インタビュー、直接測定の結果を証拠の裏付けとして使用することは基本的にはあまり行いません (Yin, 1981)。ケース・スタディにおいて、Weick (1993) の過去の山火事災害を扱った論文のように、事故記録や過去の新聞記事、また現場に赴き観察を行うなど歴史研究と重なる部分はあります。しかしケース・スタディが扱う主なデータは対象となる出来事を知っている人物に対するインタビューが中心で、他にも出来事の直接観察や測定が主な証拠の裏付けとして使用するところが歴史研究と異なります。

表1において、研究戦略をどのように選ぶかという基準を整理しています。ケース・スタディは特に「なぜ」、「どうして」から始まるリサーチクエスチョンに対して答えを出すことに長けている研究戦略です。また実験とは異なり、研究者は対象や対象のおかれている環境をコントロールせず、観察者としての立ち位置をとります。そして歴史研究と異なるところは、現代に起こった出来事に焦点を置いているところです。

表1：ケース・スタディと他の研究戦略との違い

研究戦略	リサーチクエスチョンの種類	行動事象をコントロールする必要があるか	現代の出来事へ焦点を当てているか
実験	どのように、なぜ	○	○
サーベイ	誰が、何を、どこで、いくつ くらい、どれくらい	×	○
アーカイブ分析	誰が、何を、どこで、いくつ くらい、どれくらい	×	○/×
歴史調査	どのように、なぜ	×	×
ケース・スタディ	どのように、なぜ	×	○

Yin (2018) 図1.2 (P.9) を和訳し一部加筆・修正

3. 研究の種類

研究には、大きく分けて探索研究、記述研究、説明研究、そして規範研究があり、ケース・スタディは、この4つのすべての種類の研究で用いられる研究戦略です。またそれぞれの研究から生み出された知識は、探索理論、記述理論、説明理論、規範理論と呼ばれます。まずはこの4種類の研究について解説していきます。

3.1 探索研究 (Exploratory Research)

探索研究は、これから行う研究の足掛かりとして行います。研究の初期段階において、研究テーマがなかなか決まらないという人も多いのではないのでしょうか。実務経験もなく、理論の知識もあまり多くない学生にとって、実務と理論の双方に貢献できる研究テーマを見つけることは容易ではありません。また、いろいろ試行錯誤してようやく研究テーマが見つかり、既存文献を調べ始めたものの、関連する先行理論が見つからないこともあります。このように、調査対象がよくわからないとき、あるいは選んだテーマが実際の現場で課題になっているのか分からないとき、または重要な変数が文献から絞れないときに探索研究を行います。

探索研究を行うにあたり直接観察や、現役で働いている経営者や従業員、コンサルタント、大学教員などの専門家に対するインタビュー、あるいは特定のグループにあるテーマについて議論してもらうフォーカスグループインタビューがよく使われる効果的な手段です。または最新の経営課題を知るために、現在進行形の経営課題を扱っているビジネスマン向けの雑誌や新聞を読んだり、テレビ番組などをみたりして研究のテーマや目的を見つけることもあります。また政府や外郭団体が出している企業におけるアンケート調査などの最新の報告書などに触れることでテーマを思いつくきっかけにします。または近年ではビッグデータを統計分析ソフトにかけて、いまだ説明されていない構成概念同士の相関・因果関係を探索することから始める方法もあります。

探索研究の大きな特徴の一つは、その柔軟性にあります。データ収集時の質問も事前に用意せず、その場その場の関心や、話の流れから質問を変更していくことが可能です。一方で、その高い柔軟性ゆえに、調査をしていくうちに焦点がぶれたりしてしまうリスクもあることも認識しておかなければいけません。

探索研究の成果物は、研究者によって異なりますが、具体的にはざっくりとした研究のテーマや、目的、それらに関連する主な変数や、漠然とした命題つまり変数同士の大まかな相関・因果関係です。しかし探索研究においては、データ収集の厳密さの欠如や、限定されたサンプル数、対話形式で集められたデータから構築した成果物は時に偏ったものである可能性があります。そこで探索研究から明らかになった問題に焦点を絞り、事前に準備をした上で、構造化された質問をして、現象をさらに詳しく掘り下げていく必要があります。

3.2 記述研究 (Descriptive Research)

記述研究は、探索研究の後に行われ、研究のテーマや目的がある程度明確になってから、あるいは粗削りながら理論のアイデアがある程度できあがっている段階で行われる調査です。探索研究で方向づけられた研究テーマに対して、明確な目的とリサーチクエストを設定し、文献調査を行ったうえで、さらにどのような情報をどこの誰からどのように取得するのかを事前に準備してから実地調査に入ります。記述研究は主に、「○○とは何か」という質問や、「○○はどのように起こったのか」という質問に答えるために行われる調査です。調査の目的は、現象、状況、行動などの対象に関する情報を収集したうえで、情報の整理、整頓を行い、詳細に順序だてて書くことです。情報の整理とは、テーマに関連性のあるデータのみを選択し関連性のない情報を省くこと、そして整頓とは、整理した情報があるべき場所に配置するということです。経営学における初期の研究、例えば*The Functions of the Executive* (Barnard, 1938) は、経営学を代表する記述研究です。また、他にも代表的なものとしてWeick (1993) が1949年に米国モンタナ州で起こったマン峡谷大山火事災害のケースを扱った論文があります。この論文は、複数のデータ源を使い、山火事災害の際、厳しく訓練された山火事専門の消防班の規律が乱れ、一人だと変化する状況に柔軟に対応できるところ、集団では意思決定能力が麻痺しパニックに陥り、結果として13人もの犠牲者を出してしまうセンスメイキングの崩壊の過程を詳細に記述したものです。記述研究の手法の主なものとして、文献調査、観察、インタビュー、フォーカスグループ、アーカイブ分析、アンケート調査そしてこれら複数のデータ源を組み合わせる多角的なデータから対象について記述するケース・スタディがあります。記述研究の成果物は、対象の詳細な特徴や類型、または構成概念やその相関・因果関係の仮説です。

3.3 説明研究 (Explanatory Research)

説明研究は、記述研究と同様に問題が明確な場合に行う研究です。しかし、記述研究と違い、研究者が因果関係の問題に直面している際に行います。つまり記述研究においては、開発の成功までのプロセスは何か、開発をコンスタントに成功させるためにはどのような組織構造が必要かといった記述的な問題に直面しているときに行いますが、説明研究は開発部と製造部の人材の間におけるコミュニケーションが多ければ、開発の成功の確率も高まるかといった因果関係の問題に直面している場合です。この因果関係の仮説は、記述研究から明らかになることもありますし、既存文献から推論することもあります。

説明研究は、入念な事前準備と計画が必要になります。探索・記述研究で明らかになったことを踏まえ、既存理論との比較を入念に行い、そのうえで新奇性のある仮説を設定します。その後、仮説を操作化し、どの母集団からどれくらいのサンプルをどのように抽出するのことも事前に決めておく必要があります。そういった意味で、前述してきた調査の中で最も厳密なルールに則って調査を進めていくところに特徴があります。

この研究の成果物は、定量データを統計的に実証された、あるいは定性データによって詳細に説明された因果関係です。探索研究や記述研究では、詳細ではあるが局所的な仮説で、それが他の状況に当てはめることができない、いわゆる一般化に乏しいものであったが、説明研究ではその一般化が高まった、様々な状況に当てはまる汎用性の高い理論になります。表2は、三種類の研究の違いをまとめたものです。

表2：探索、記述、説明研究の違い

	探索研究	記述研究	説明研究
対象への知識	ほとんどない、あるいは漠然とある	部分的にある	明確にある
研究目的、リサーチクエスチョン、仮説	漠然とした研究目的とリサーチクエスチョン	明確な目的とリサーチクエスチョン	明確な目的とリサーチクエスチョン、そして仮説
主な研究アプローチ	文献調査、観察、インタビュー、フォーカスグループ、サーベイなど	文献調査、観察、インタビュー、ケース・スタディ、サーベイなど	主にサーベイや実験、ケース・スタディが使われることもある
調査のアプローチ	柔軟	厳密	非常に厳密
成果物	より焦点が定まった研究の目的とリサーチクエスチョン、あるいはざっくりとした理論のアイデア	対象の詳細で濃厚な整理整頓された記述。対象の特徴、類型、構成概念同士の相関関係	大規模な定量データによって実証された、あるいは、豊富な定性データによって説明された因果関係

筆者作成

研究は、探索、記述、説明という具合に段階を追って進められていくのですが、すべての研究者が探索研究から始める必要はありません。すでに指導教官が探索、記述研究を行い、そこから得た研究テーマやリサーチクエスチョン、因果関係に関する仮説を与えられることもあるでしょうから、そういう場合においては説明研究から入ることもあります。またこれらの研究は連続した線上にあり、一つの学術論文において、探索と記述、または記述と説明というように、

二種類の研究を同時に行うことも可能です。

3.4 規範研究 (Prescriptive Research)

規範研究とは、意思決定者に対してなにをするべきか、なにをするべきでないかという規準を与える理論を構築するための研究です。言い換えると規範研究は、「How should」や「How can」で始まるリサーチクエスチョンに答えるためのものです。Christensen and Carlile (2009) は、理論の有効性は、行動に対する結果を予測する能力にあると主張し、すべての研究は最終的には規範理論を作ることを目指すべきであると述べております。規範研究は、研究の最終形ということもあってプロセスは非常に複雑です。そのことは、未知のウイルス（問題）に対して、新薬（問題解決法）を開発するには基礎研究、非臨床試験、臨床試験を経て、承認申請・製造販売に至るという非常に複雑で10年から18年といわれる長い期間を要することからも想像ができるかと思えます。

Christensen and Carlile (2009) は、記述研究と規範研究の違いを、記述研究は、過去に起こったあるいは現在起こっている出来事から現象を特性で分類する研究であり、規範研究は、過去に起こった事から、将来を予測する研究だと述べております。記述研究は、観察から構成概念を生み出し、次に現象を分類し、最後に構成概念同士の相関関係を見つけます¹。例外 (Anomaly) が見つかった際に、現象の分類を再考することで記述理論は改善されていきます。一方で規範理論は、まず相関関係を因果関係へと飛躍させ、それを正しいと仮定し、リアルタイムの問題に適用して効果を確認します。例外が起こったら記述研究のように現象の特性で分類するのではなく、研究者は、例外が起こった時に経営者が置かれていた環境や状況を特定します。そうすることで規範理論は改善され、最終的には経営者が身を置く一連の状況を明らかにすることができます。さらに調査が進むと、状況によって分類された規範理論は、経営者が求める結果を出すためには、特定の状況において、どのようなアクションを取るべきか正確に予測することができるようになります。

Christensen and Carlile (2009) は、記述理論から規範理論への変換していくのかという過程を有人飛行の歴史を例にとり説明しております。中世において研究者は「どうしたら人は空を飛べるのか」という「How can」から始まるリサーチクエスチョンに対して、まずは空をうまく飛べる動物と飛べない動物に分類することから始めます。その結果、翼に羽がついた動物はうまく飛べるが、そうでない動物は飛べないというおおざっぱな分類を行います。このような分類を行うのは代表的な探索・記述研究になります。この際、翼はあるが羽がついていないがうまく飛ぶことができるコウモリや、翼も羽もあるが飛べないダチョウなどの例外があると、分類スキームを見直し、そうすることで記述理論は改善されます。この記述研究の結果をもとに、人は手に翼と羽をつけて高い建物から飛び降りるのですが、当然ですが、残念な結果に終わってしまいます。そうした失敗から、当初の分類は間違っていたのではないかという疑念が生まれました。そこから他要因の探索が始まりました。次に研究者たちは、鳥類の特性を他の動物と区別するのは含気骨であるとし、固い骨をもつ人間が飛ぶことは困難であるという結論に一度は至ります。それでも研究者たちは諦めず、十分な力で翼を羽ばたかせることでこの欠点を克服できると予測し、そのためのメカニズムを開発します。しかしこれも失敗に終わってしま

¹ Christensen and Carlile (2009) は、探索研究、記述研究、説明研究を一括りにして記述研究と定義している。

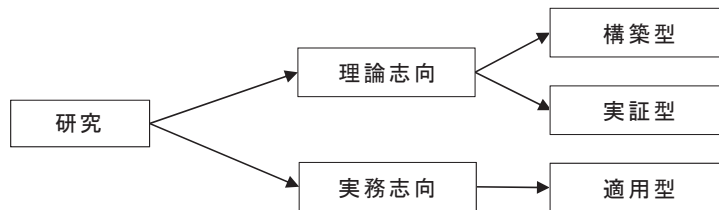
います。記述理論から生み出されるおおざっぱな相関関係の理論武装では、「どうしたら人は空を飛べるのか」という質問には答えられなかったのです。

研究に転機が訪れたのは、ダニエル・ベルヌーイ (Daniel Bernoulli: 1700 - 1782) という物理学者が、流体力学の観点から、翼が空気を切る際に生まれる揚力をつくるエアロfoilと呼ばれる形を発見したことです。そこから研究者たちはエアロfoilを備えた機械を作ることができれば、人は飛ぶことができると予測し、実行に移し事実成功をおさめます。初期段階での飛行機の多くは墜落してしまうのですが、失敗という例外は研究者に新たな分類スキームを考える機会を与えることになりました。ただ今回は、記述研究で行ったよう飛べる、飛べない動物という分類スキームではなく、「墜落の際、飛行士や周りの状況はどのようなものだったのだろうか」といった、飛行士のおかれている状況を分類し、その状況で起こりうる結果のデータを収集していきました。これを繰り返すことで技術改善と状況への適応ができるようになっていったのです。このように「普段はこうして飛行機を飛ばさなくてはいけない。しかし天候など特定の状況においては、違った飛ばし方をする必要がある。そしてこういう状況においては、飛ばすことは危険である」といったガイドライン、つまり規範理論が構築されていったのです。

4. 研究の志向性と型

研究には、理論構築型、理論実証型、そして理論適用型という三つの型があります。前者の二つの型は、理論志向研究、後者を実務志向研究といいます (Verschuren, Doorewaard, & Mellion, 2010) (図1)。探索、記述研究においては、理論構築型の用いることが多く、説明研究においては理論実証型、規範理論構築研究においては、理論適用型を用います。

図1：研究の分類



Verschuren et al. (2010) を和訳し一部加筆・修正

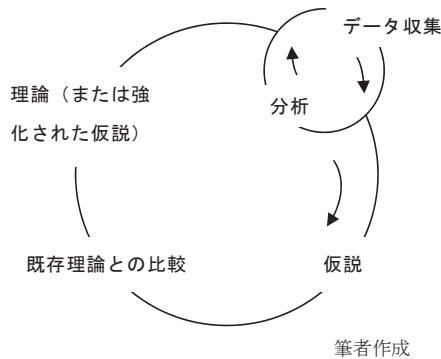
4.1 理論構築 (Theory Building)

理論構築型研究は、観察から得られた類似事項から仮説を導き出し、さらにデータによって繰り返し丁寧に裏付けを行うことで仮説を強化していくプロセスになります。例えば、現代のように人工衛星からの画像を基に天気を予測する以前、人々は様々な自然現象から天気を予測していました。富士山の山頂にかかる雲の種類もその一つです。人々は富士山に笠雲がかかると、天候が悪化することを発見し、その後何度もこの因果を観察してきました。繰り返し行われる観察から富士山の山頂に笠雲がかかると天候が悪化することが多いという法則を導き出したのです。こうした経験的な観察から一般的な規則を導き出す方法を帰納法 (Inductive Method) と言います。

理論構築の手順は、まず現象・事象から入り、データを収集します。収集したデータを分析

していくうちに類似事項から徐々に仮説が浮かび上がってきます。その仮説を新たに収集したデータと比較して調整していくというプロセスを反復していくことで、仮説が強化されていきます。そしてその仮説がその後収集したデータによって反証されないといった時点でデータ収集と仮説の修正の反復を止めます。この時点で、浮かび上がった仮説と関連する既存理論とを比較し、産出された仮説は既存理論のどの領域に位置づけられるのか、またどの穴を埋めているのかということを考察し、新しい理論を構築するのです (図2)。

図2：帰納サイクル

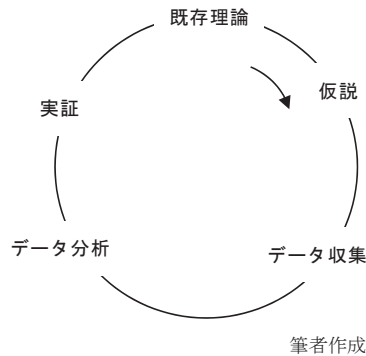


4.2 理論実証 (Theory Testing)

理論実証型研究は、既存理論から論理的に導き出した仮説を、具体的な事象や現象から得られたデータをもとに事実的な根拠をもって証明します。こうした論理から推論し規則性を導き出す方法を演繹法 (Deductive Method) と呼びます。先ほどの富士山の山頂に笠雲がかかると天候が悪化するという経験から得られたこの法則は、富士山以外の同様な独立峰においても当てはまるということを推測します。そして、実際に、他の独立峰において、山頂にかかる雲の種類と、天候の変化に関するデータを収集し、その仮説が事実かどうかを確かめるのです。

理論実証の手順は、まず既存理論を精読したうえで、理論の矛盾点や、いまだに研究されていない領域を理論の穴として提示します。その後、その理論の穴を埋めるためのリサーチクエスチョンを設定します。その後、さらに既存理論を掛け合わせることでリサーチクエスチョンへの答えになるような命題や仮説を推論します。そしてその仮説を実証するためにデータを収集し、分析を行います。仮説がデータによって裏付けられることで、収集されたデータの範囲においてそれは理論となります。ここで実証された理論は、異なるサンプルセットにおけるさらなる追試を経てより強固で汎用性の高い理論になっていくことになります (図3)。

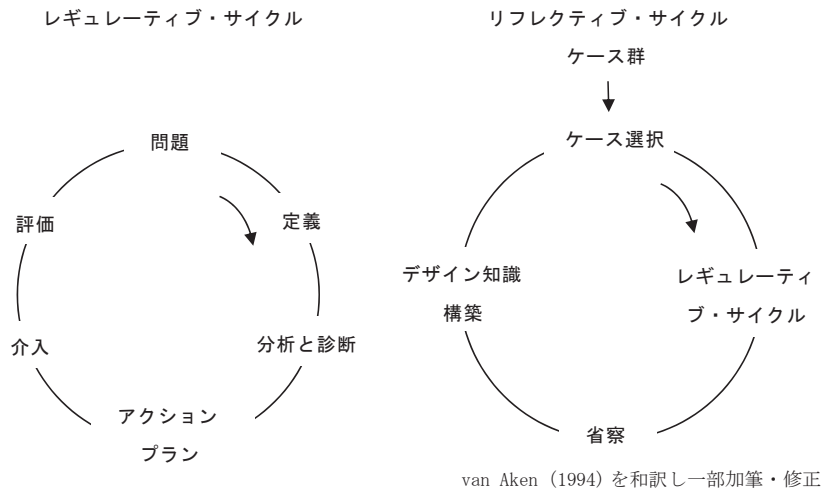
図3：演繹サイクル



4.3 理論適用 (Theory Applying)

ケース・スタディは、理論の実証と構築とは別に、理論適用 (Theory Applying) につかわれます (Gummesson, 2000)。理論適用とは、問題に対して、既存理論からアクションプランを導き出し、それを実際に複数のケースに適用することでデザイン知識 (問題解決理論) を構築する研究の型です。オランダ人方法論学者の van Aken (2004) は、すでに説明した構築型研究および理論実証型から生み出された理論は、実務家が経営問題を解決するのにあまり役に立っていないことを問題視し、経営学においても薬学や工学と同様に問題解決のための規範理論、いわゆるデザイン知識の構築が必要であると主張しました。van Aken (2004) は、デザイン知識の構築には二つのサイクルを回す必要があると述べております。一つ目は、アクションリサーチでも使われるいわゆる伝統的な問題解決のためのサイクルで、レギュレーティブ・サイクルと呼ばれているものです。これは、複雑な現象から問題を抽出し定義することから始まります。次に、問題を診断し、アクションプランを既存理論からデザインします。そして問題に介入し、解決に貢献したのか評価を行います。しかし、レギュレーティブ・サイクルのみを回しただけでは、ある特定のケースにおける問題解決に役に立つアクションプランは構築できても、他の組織の問題にはあてはまらない限定的なものになってしまいます。van Aken (2004) は、デザイン知識を構築するには、レギュレーティブ・サイクルを含む、もう一つのサイクル、リフレクティブ・サイクルを回す必要があると主張します。このサイクルはまず、同じような問題を抱えるケース群からケースを一つ選び、レギュレーティブ・サイクルを回します。そして得られた結果からアクションプランを改良できないか省察し、修正を施した改訂版アクションプランを構築します。そして再びリフレクティブ・サイクルを回すということを繰り返すことで、アクションプランが改良、一般化されていき、これ以上改良の余地がないという点 (証拠の飽和点) にいったらケースの追加をやめます。こうしてより問題解決のための理論、つまりデザイン知識が構築されていくのです (図4)。

図4：理論適用サイクル



理論適用型の研究は、決定科学や政策科学では多く行われている一方で、社会学、経営学においてはまだまだ開発段階であると同時に、手順が非常に複雑な上、その進め方についても多くの議論が進行中です (cf. Bazerman, 2005; Ferraro, Pfeffer, & Sutton, 2005)。本シリーズにおいて社会科学において多く使われる理論構築型と、理論実証型に焦点を絞り解説をしていきます。

5. 経営学研究におけるケース・スタディ研究戦略の現実

ケース・スタディを学ぶ上で前もって知っておかなければいけない現実があります。それは経営学のトップジャーナルにおいてケース・スタディを使っている投稿論文の採択率は決して高くないということです。少し昔の調査になりますが、ある経営学者らが、経営学分野の主要ジャーナル10誌で1995年から2000年にかけて採択された総論文数のうち何割がケース・スタディによるものかを調査したところ、論文の総数2643本中159本でした。それは全体の僅か6%にしかなりません。さらに経営学ジャーナルトップ3誌に限定すると以下の様にさらに割合は小さくなります (Gibbert, Ruigrok, & Wicki, 2008)。

<i>Academy of Management Journal</i>	1.9%
<i>Administrative Science Quarterly</i>	1.3%
<i>Strategic Management Journal</i>	3.6%

採択率が低い主な理由は、経営学全般において、北米を中心に定量研究が主流であり、科学的厳密性に重きをおくその立ち位置からみるとケース・スタディは、一般化や客観性の問題、データ収集・分析過程における厳密性の欠如などの課題が多いことが挙げられます (Bengtsson, Elg, & Lind, 1997)。また論文の構成がある程度テンプレート化され、データも表に数字が整然と並んでいる定量研究型論文と違い、ケース論文は構造や定性データの提示の仕方などが定型化されておらず、定量研究者から見ると「Messy (散らかっている)」という印象を持たれてし

まいます (Suddaby, 2006)。さらに詳細で分厚い記述が魅力のケース・スタディの結果はページ数に制約のあるジャーナル (大体15ページから30ページ) では出版しづらいといった実務的な問題もあります。こうした理由から経営学においてケース・スタディはマイナーな研究戦略と言わざるを得ません。

6. ケース・スタディの魅力

執筆に時間がかかり、またジャーナルへの採択率が低いケース・スタディ論文なのになぜいまだ多くの研究者はケース・スタディを行うのでしょうか。それはケース・スタディには、他の研究戦略にはない魅力が多くあるからに他なりません。ケース・スタディの大きな魅力の一つは、豊富な情報量と結果の具体性にあります。他の研究戦略が、一つや二つのデータ源に頼って理論を実証、構築をしております。例えばサーベイですと、アンケート用紙を送り、回答を分析するという一つのデータ源しかありません。一方、ケース・スタディは、インタビュー、アーカイブ、サーベイ、観察等複数のデータ源から得られた膨大な情報を基に結論を導き出すことができます。こうして具体例と複数のデータに裏付けられた理論は、深い洞察と示唆に富むものになります。

さらに、サーベイとは異なり、ケース・スタディは実際に実務者と直に接触することが多く、経営の実情に深く入り込むことができます。こうして集められた最新の情報から実務家の関心領域に密着した、また実務家にとっても実際に使える知識を産出することが可能になるのです。また定量的なサーベイ調査では難しい、細かいプロセスを記述することができます。例えば、Sutton (1987) という学者は、企業の死のプロセス、つまり企業が倒産していくプロセスを決別と、再結合のプロセスであると解釈し、いくつかの段階に分け説明を試みました。

また、既存理論から仮説を推論する演繹アプローチと異なり、データから仮説、理論を導き出すために、既存研究から思いつくことができない定説を覆すような理論構築を可能にする研究戦略なのです。Sutton (1987) は、企業が倒産していくプロセスで、従業員の意欲が下がると当然考えられていたのですが、面白いことに逆に上がっていくことを発見しております。事実、「経営学の面白い論文」というテーマで *Academy of Management Journal* の編集委員を対象にアンケート調査 (Bartunek, Rynes, & Ireland, 2006) を行った結果、最も「面白い論文」として選出されたのは、Dutton and Dukerich (1991) や Sutton and Rafaeli (1988) などケース・スタディを研究戦略として使ったものでした。この様に、ケース・スタディは決して主流とは言えませんが、定説を覆す可能性を秘めた、理論のイノベーションを目指す研究者にとって非常に魅力的な研究戦略なのです。

ケース・スタディを研究戦略として選ぶ際、気を付けなくてはいけないことがあります。ケース・スタディは定量研究に比べると、調査の手順の厳密性や、客観性などに課題があると認識されている傾向にあることは前記しました。そうした理由から、この研究戦略から生み出される成果物にはそれらの欠点をカバーするだけの「面白い」要素が特に求められているということです。社会学者の Davis (1971) は、*Philosophy of the Social Sciences* というジャーナルに出版した論文 *That 's Interesting! Towards a phenomenology of sociology and a sociology of phenomenology* の中で、「面白い理論」と「面白くない理論」の違いを端的に述べております。面白い理論とは、人々が正しいと思いついてる仮説を裏切るもので、一方で面白くない理論

とは、人々が思っている仮説を単に肯定するものであるということです。Davisは、すべての面白い命題は、「Xだと思われていたものは、実はXではなかった」、あるいは、「Xだと受け入れられているものは、実はXではなかった」という言い方に集約できるといって、面白いと思わせる理論の10を超えるパターンを論文において紹介しております。ケース・スタディには、こういった定説を覆す、あるいは大きく延長する、それを読んだ読者が、その後世界をすこし違った視点で見ることができるような結論が期待されていることを覚えておいてください。

7. ケース・スタディ研究戦略の代表的文献

今日までケース・スタディ研究戦略に関する著書や論文は数多く執筆されてきました。その中でも、経営学者が引用する文献は、限定される傾向にあります。Larsson and Lowendahl (1996) は、定性研究のどの研究戦略が組織研究者にとって支持され、実際に使われているか調査を行いました。 *Academy of Management Journal*, *Journal of Administrative Science Quarterly*, *Organization Science*, *Strategic Management Journal* を経営学におけるトップジャーナルと定義し、その中から1984年から1994年の間に出版された12本の定性研究論文をメタ分析しました。その結果、下記の三つの文献を引用することで自らの方法論の正当化を図っていることが明らかになりました。

-
- ◆ Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Aldine.
 - ◆ Yin, R. K. (1984). *Case study research: design and methods*. Sage Publications.
 - ◆ Eisenhardt, K. M. (1989a). Building Theories from Case Study Research. *The Academy of Management Review*, 14 (4), 532-550.
-

すでに古典の域にはいっているこの三つの著書ですが、現在でも多くの定性研究論文において引用され続けています。さて、これらの文献を読み比べてみると、それぞれが独立したものではなく実は相互に関連していることがわかります。Eisenhardt (1989a) は、Glaser and Strauss (1967) やYin (1984) が提示した概念や手法を多く取り入れているのです。一方で、それぞれの調査の手順など異なっている部分も多くあります。

8. 問題意識と目的

ケース・スタディを研究戦略として採用している国内外ジャーナルに投稿された論文を査読していると、誤った解釈に基づきこれらの文献を引用しているケースが少なくありません。誤った引用の典型例として以下のようなものがあります。

本調査はA社の組織変革のプロセスを明らかにするためにケース・スタディ (Glaser & Strauss, 1967; Yin, 1984) を研究戦略として適用した。

ケース・スタディ研究戦略をあまり深く理解していないと見過ごしてしまいそうな一文です

が、見る人が見れば、筆者はケース・スタディを恐らく理解していないだろうということがわかってしまいます。Glaser and Strauss (1967), とYin (1984) は、どちらもケースを扱う点、そして定性データを中心とした複数のデータ源から集め、一つの事象を様々な方向から見る共通点がありますが、両者の研究アプローチ、手順、そしてもともと両者が立っている研究者としての哲学的スタンスなどが異なるのです。

このシリーズの目的は、ケース・スタディの代表的な文献 (i.e. Glaser & Strauss, 1969, Yin, 1984, Eisenhardt, 1989a) の相違点を厳密に比較し、より深く理解することにより、将来的にこのような間違いを起こすことを防ぐことにあります。またこれらのアプローチを理解することで、ケース・スタディの大枠を理解することにあります。

さて、社会科学の方法論の文献 (cf. Saunders et al., 2009; Creswell & Creswell, 2018) にはグランデッドセオリーアプローチとケース・スタディは別の研究戦略としているものも少なくありません。これらの文献においてYinが提唱したアプローチをケース・スタディと呼んでおります。一方でケース・スタディはSimons (1996) はそれを方法論的選択であると主張した一方、Stake (1995) は研究される対象によって定義されるという議論がある様にケース・スタディの定義は定まっておられません。本シリーズにおいてケース・スタディ研究戦略を、定性データを中心にケースをつかって理論化を目指す共通点から、Glaser and Strauss (1967), Yin (1984), そしてEisenhardt (1989a) のアプローチを包括する上位概念と位置づけ、比較分析を行っていきます。

9. おわりに

本稿において、ケース・スタディの定義、研究戦略の選び方、型を紹介するとともに、ケース・スタディは経営学トップジャーナルにおいて採択率が低いという事実や既存の理論をブレイクスルーできるという魅力のある研究アプローチであるということを説明しました。またケースを使う定性研究方法としてGlaser and Strauss (1967), Yin (1984), Eisenhardt (1989a) が代表的なアプローチとしてあるということや、これらのアプローチの相違点をあまり理解していない研究者が少なくないことを議論しました。次回から3つのアプローチを比較することでケース・スタディについて理解をより深めていくことにしましょう。

参 考 文 献

- Barnard, C. (1938). *The functions of the executive*. Cambridge: Harvard.
- Bartunek, J. M., Rynes, S. L., & Ireland, R. D. (2006). What Makes Management Research Interesting, And Why Does It Matter? *Academy of Management Journal*, 49(1), 9-15.
- Bazerman, M. H. (2005). Conducting Influential Research: The Need for Prescriptive Implications. *Academy of Management Review*, 30(1), 25-31.
- Bengtsson, L., Elg, U., & Lind, J.-I. (1997). Bridging the transatlantic publishing gap: How North American reviewers evaluate European idiographic research. *Scandinavian Journal of Management*, 13(4), 473-492.
- Christensen, C. M., & Carlile, P. R. (2009). Course Research: Using the Case Method to Build and Teach Management Theory. *Academy of Management Learning & Education*, 8(2), 240-251.
- Creswell, J. W., & Creswell, J. D. (2018). *Research design: Qualitative, quantitative, and mixed methods approaches*. Los Angeles: Sage publications.

- Davis, M. S. (1971). That's Interesting!: Towards a Phenomenology of Sociology and a Sociology of Phenomenology. *Philosophy of the Social Sciences*, 1(2), 309-344.
- Dutton, J. E., & Dukerich, J. M. (1991). Keeping an Eye on the Mirror: Image and Identity in Organizational Adaptation. *The Academy of Management Journal*, 34(3), 517-554.
- Eisenhardt, K. M. (1989a). Building Theories from Case Study Research. *The Academy of Management Review*, 14(4), 532-550.
- Eisenhardt, K. M. (1989b). Making Fast Strategic Decisions In High-Velocity Environments. *Academy of Management Journal*, 32(3), 543-576.
- Ferraro, F., Pfeffer, J., & Sutton, R. I. (2005). Prescriptions are not Enough. *Academy of Management Review*, 30(1), 32-35.
- Gibbert, M., Ruigrok, W., & Wicki, B. (2008). What passes as a rigorous case study? *Strategic Management Journal*, 29(13), 1465-1474.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*: Aldine.
- Gummesson, E. (2000). *Qualitative methods in management research*: Sage.
- Larsson, R., & Lowendahl, B. (1996). *The qualitative side of management research*. Paper presented at the Academy of Management, Cincinnati, OH. .
- Saunders, M., Lewis, P., & Thornhill, A. (2009). *Research methods for business students*: Pearson education.
- Simons, H. (1996). The Paradox of Case Study. *Cambridge Journal of Education*, 26(2), 225-240.
- Stake, R. E. (1995). *The art of case study research*: Sage.
- Su, H.-C., Linderman, K., Schroeder, R. G., & Van de Ven, A. H. (2014). A comparative case study of sustaining quality as a competitive advantage. *Journal of Operations Management*, 32(7-8), 429-445.
- Suddaby, R. (2006). From the Editors: What Grounded Theory is Not. *Academy of Management Journal*, 49(4), 633-642.
- Sutton, R. I. (1987). The Process of Organizational Death: Disbanding and Reconnecting. *Administrative Science Quarterly*, 32(4), 542-569.
- Sutton, R. I., & Rafaeli, A. (1988). Untangling the Relationship between Displayed Emotions and Organizational Sales: The Case of Convenience Stores. *Academy of Management Journal*, 31(3), 461-487.
- van Aken, E. J. (2004). Management Research Based on the Paradigm of the Design Sciences: The Quest for Field-Tested and Grounded Technological Rules. *Journal of Management Studies*, 41(2), 219-246.
- van Aken, J. (1994). De bedrijfskunde als ontwerpwetenschap - de regulatieve en de reflectieve cyclus. *Tijdschrift voor Modern Management*, 66(1), 16-26.
- Verschuren, P., Doorewaard, H., & Mellion, M. (2010). *Designing a research project* (Vol. 2) : Eleven International publishing house The Hague.
- Weick, K. E. (1993). The Collapse of Sensemaking in Organizations: The Mann Gulch Disaster. *Administrative Science Quarterly*, 38(4), 628-652.
- Yin, R. K. (1981). The Case Study Crisis: Some Answers. *Administrative Science Quarterly*, 26(1), 58-65.
- Yin, R. K. (1984). *Case study research: design and methods*: Sage Publications.
- Yin, R. K. (2018). *Case study research and applications: Design and methods*: Sage publications.

[よこざわ こうどう 横浜国立大学大学院国際社会科学研究院准教授]

[2019年4月26日受理]